The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Eliot の詩劇における二つの道 : 肯定の道を中心に
Author(s)	岡村, 祥子
Citation	Osaka Literary Review. 1973, 12, p. 76-88
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25707
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Eliot の詩劇における二つの道

——肯定の道を中心に——

岡　村　祥　子

I

1933年 Eliot は "…the most direct means of social 'usefulness' for poetry is the theatre"[(1)] と言った後，彼は詩劇に主力を注ぐこととなり 1935年の *The Murder in the Cathedral* を最初とし，*The Family Reunion* (1939)，*The Cocktail Party* (1950)，*The Confidential Clerk* (1954)，*The Elder Statesman* (1959) と合計五作を発表しているが，これらを通じるテーマとして真実の自己を意識した人間の取るべき道が描かれている。その道には二つあり，一つはこの世にあって人間を愛しながら普通の生活を営なむ道で，もう一つはこの世と自己を捨て直接神に向う道である。二つの道という考えが具体的に示されたのは *The Cocktail Party* に於てで，精神分析医の Reilly が Celia との会話の中で自分の罪に目覚め，神を意識した人々にとって取るべき道を示す際，第一の道を次のように説明する。

They may remember
The vision they have had, but they cease to regret it,
Maintain themselves by the common routine,
Learn to avoid excessive expectation,
Become tolerant of themselves and others,
Giving and taking, in the usual actions
What there is to give and take. They do not repine ;
Are contented with the morning that separates
And with the evening that brings together
For casual talk before the fire

Two people who know they do not understand each other,
Breeding children whom they do not understand
And who will never understand them.(2)

彼によると意識的に人生を送らない多くの現代人の中でこの道は Good life であり，他方第二の道については次のようにいう。

There *is* another way, if you have the courage.
The first I could describe in familiar terms
Because you have seen it, as we all have seen it,
Illustrated, more or less, in lives of those about us.
The second is unknown, and so requires faith—
The kind of faith that issues from despair.
The destination can not be described ;
You will know very little until you get there ;
You will journey blind. But the way leads towards possession
Of what you have sought for in the wrong place.(3)

以上のように二つの道が語られるが，C. H. Smith(4) が指摘しているように，第一の道は肯定の道，第二の道は否定の道と名付けられる。否定の道については伝統的な流れがあるが，肯定の道は現代になって意識され始めたもので，C. H. SmithはEliotの友人で共に Anglo Catholic の知的運動に加わった Charles Williams がこれを積極的に取り上げていることを指摘している。

この二つの道の考えは初代キリスト教教父達の神秘思想に由来し，特に五世紀末頃の Dionysius Aleopagita の著作の中で肯定の道と否定の道が示され，どちらも神へ至る道と説かれた。後代の神秘思想家，特に十字架の聖ヨハネの著書には否定の道は神に至る自己放棄，この世の全てのものからの離脱，神への思いのみに生きること，霊魂にとっては暗闇を体験しながら神の愛に身を委す道と語られている。この道は直接神に向う道で修道者達によって歩まれ，キリスト教の伝統の中では大きな流れとなり，聖者への道とも言われる。一方肯定の道は神の創造による全てのものは祝福にみちていると知り，神の似姿である人間がこの世のものを通して神を認め，互いに愛し合うことによってこの世で神の愛をあらわす道と言える。

これは普通の人々によって歩まれうる道で，当然のこととして特別にキリスト教の中で取り上げられてはいなかったが，現代，特に人間が愛することを忘れ精神的に後退した時代になって強調されるようになった道ということもできる。

Eliot は *Four Quartets* で二つの道を次のように表わしている。

> There are three conditions which often look alike
> Yet differ ompletely, flourish in the same hedgegrow :
> Attachment to self and to things and to persons, detachment
> From self and from things and from persons ; and growing
> between them, indifference
> Which resembles the otheres as death resembles life,
> Being between two lives-unflowering, between
> The live and the dead nettle. ("Little Giddings", III)[5]

この attachment と detachment がそれぞれ第一の道と第二の道を指し，第三の indifference の状態は自己を自覚することなく，真実に人を愛することもなく自己の孤独の中に閉じこもっている現代人の精神的に荒廃した姿を表わしていると考えられる。このような人間の姿を It is human, when we do not understand another human being, and cannot ignore him, to exert an unconscious pressure on that person to turn him into something that we can understand : many husbands and wives exert this pressure on each other.[6]

と述べているが，彼等こそ indifference の典型で現代の多くの人々の実情だといえる。これらの或る人がある瞬間，自己を意識し，自分の罪を理解することによって先の二つの道のどちらかを選択することになる。

二つの道の違いは，人を通じて間接的に神を知ることと直接神に向うことの違いは勿論のこととして，否定の道を行く人々は絶えざる自己犠牲と人間的な苦しみが要求されるとはいえ，そこには神との出合いの体験があり，人類の救いに直接的に関与する。一方肯定の道を行く人々にとっては神との出合いは歓喜の一時(ひととき)，或いは直感的な深い理解の一瞬として体験さ

れるが，それは続くものでなく，又そこに留まることもなく人々は日常生活に立ち戻り，その歯車の中でまわり始めると考えられる。この二つの違いは *Four Quartets* に示されている。

.....to apprehend
The point of intersection of the timeless
With time, is an occupation for the saint—
No occupation either, but something given
And taken, in a lifetime's death in love,
Ardour and selflessness and self-surrender.
For most of us, there is only the unattended
Moment, the moment in and out of time,
The distraction fit, lost in a shaft of sunlight,
.....
.....These are only hints and guesses,
Hints followed by guesses ; and the rest
Is prayer, observance, discipline, thought and action.
The hint half guessed, the gift half understood, is Incarnation.
("Dry Salvages, V") (7)

しかもこの二つの道は互いに深い関係があるといえる。即ち人間は個々にではなく，共同体として生きているのであり，否定の道をいく者はその行為によって共同体の他の成員に神の証人としての役割を果し，影響を与える。肯定の道をいく人々はたびたび否定の道をいく者の行為によってあの一瞬の神の光を受け変化する。言いかえれば共同体なしには否定の道も存在理由はなく，この二つの道は神のもとで調和している。

以上の二つの道を *The Murder in the Cathedral, The Family Reunion, The Cocktail Party* について考えてみると明らかに三つとも共通して見られるのは第二の否定の道である。特にはじめの二つの作品の中では精神的な世界に属する人々とこの世に属する人々の間に対立があり，内面の世界で選択を迫られ，否定の道へと入っていく人々が描かれている。*The Murder in the Cathedral* の Thomas は英国国王やこの世の栄誉との戦いよりも，自己の中にある殉教に対する態度，即ち殉教という行為によっ

て最も輝かしい聖者になるという自己満足と，神の意志に自己を全く委せきることとの間の葛藤に苦しみながら，最終的に真の殉教の道を進むことになる。*The Family Reunion*の主人公 Harry は，船上から妻が海に落ちて死んだ時，自己の中に殺意があったため自分が殺したという罪の意識にさいなまれ，その意識の根本にあるものを理解できないまま家族のもとに戻ってくるが，叔母の Agatha の神的ともいえる深い助けによって彼の父が同じ様に母に殺意を抱いていたこと等を知らされ，罪の意識の根本にある原罪を悟り，自分の罪，家族の罪を償うことの必要を知って宗教的な道に入ることを決心して家を出ていく。第三の *The CocktailParty* の主人公達の一人 Celia は Edward の愛人であったが，自分が真実には愛されておらず実は自分も愛していなかったこと，求めていたのは絶対者に対する愛であったことを悟り，人間同志の愛の空しさを悟る。人間の孤独と自らの罪を深く意識することによって徹底的に愛する道を Reilly の助けを借りて見出し，第二の道を選んで修道者となり異郷の地にあって看護婦として働くうちに殉教することになる。

The Cocktail Party では Celia も欠くことのできない主人公であるが，劇の前面に押し出されているのは肯定の道を選ぶことになる Edward と Lavinia の Chamberlayne 夫妻である。彼等は現代世界の中で，先に indifference と説明した互いを理解し合わず，不和と憎しみの中にいる不幸な夫婦の典型として示される。彼等の変化がこの劇の主要なテーマである。この劇ではじめて否定の道よりも肯定の道が主なテーマとして強く表われてきたといえるが，この劇で突然肯定の道が示されたのでなく，はじめの二つの劇の中にもすでにその道がみられると考え，Chamberlayne 夫妻の変化と同時にそれぞれの劇の中でどのように表われていたかを見ていく。

II

Edward と Lavinia が如何なる精神の持ち主であったかは劇のはじめに示される。Cocktail Party を催すことになっていた日の朝，突然 Lavinia は姿を消す。彼女がいなくなってはじめて Edward は自分がどんな人間

であるかを知るきっかけを与えられる。彼の性格は見知らぬ客として現われた Reilly の助けを借りながら明らかにされていく。彼は妻以外の女性 Celia と恋人の関係にあるが，妻に帰ってほしいと望む。愛しているとはいえないが，妻なしには生きていけないと感じる。本来ならば恋人との結婚も可能なのだが，実は彼女を愛していないことに気づく。彼の人生に於て人を真実に愛する経験を持つことはなかった。Reilly に妻を愛しているのかと尋ねられた時にも

> Why, I thought we took each other for granted.
> I never thought J should be any happier
> With another person. Why speak of love?
> We were used to each other.[8]

と答え，彼の結婚生活が習慣的で愛することへの真剣な態度もなく，妻の人格への尊敬もないことが示される。それと同時に妻が Peter という若者と関係があることさえ気づいておらず，質問にも "There was no other man/None that I know of"[9] と答え妻に対する無関心さ，生活のいい加減さが明らかにされる。一方 Lavinia は夫に愛人のあることを知り，愛されていないことに苦しむが，それに加えて彼女の恋人のはずの Peter，勿論それも彼女の方が積極的であったのだが，彼が自分に対するとは全く違った真剣さをもって Celia を深く愛していることに気がつき，結局愛されていないことを知る。夫や恋人との関係を通じて彼女は誰からも愛されないという思いに苦しみ，自分中心的にしかものを見れない彼女はノイローゼ気味になって Reilly を尋ねる。彼女は何事に関しても自分が相手よりもよく知っているように振舞い，愛らしさのない利己的な人間であった。このように唯社会の習慣と惰性によって五年もの結婚生活を続けていた二人であるが，突然相手がいなくなると自分が真空状態に陥ち入ってしまうことに気づく。特に Edward の場合は Celia との会話の中で自分の内面の奥底にあるものを理解する。

> The self that can say'I want this—or want that'—
> The self that wills—he is a feeble creature ;

He has to come to terms in the end
With the obstinate, the tougher self ; who does not speak,
Who never talks, who cannot argue ;
And who in some men may be the *guardian*—
But in men like me, the dull, the implacable,
The indomitable spirit of mediocrity.(10)

しかし何故相手に帰ってもらいたいかをはっきり自覚せず，理由もわからないまま，Lavinia は戻ってくるが，そのため事態は一層悪化し，ついに二人は別居し互いに苦しむ。二人はそれぞれ Reilly を尋ねるが，彼は直接二人を対面させ，現実の彼等がどんな人間であるかを明らかにし，どれ程二人が似合いの夫婦，即ち同じ孤独を体験しているかを教える，

See it rather as the bond which holds you together.
While still in a state of unenlightenment,
You could always say : 'he could not love any woman;'
You could always say : 'no man could love her.'
You could accuse each other of your own faults,
And so could avoid understanding eath other.
Now, you have only to reverse the propositions
And put them together.(11)

このように彼等二人は思いこんでいる自分を改めてそれぞれ努力することが重要になってくる。Edward は愛されることによって愛することを学び，Laviniaは 愛することによって愛らしい人間となる可能性をもっている。Edward は自分が凡庸な人間であることを自覚し，Lavinia は夫に対する責任を感じる人間であるから意志すれば新しく生きることができる。Edward は Reilly に言われて初めて自分達の真実の姿を知らされ，それを認識し，再び生活をやり直す決心をする。最後の幕に至って再び Cocktail Party が行われることになっている時，Celia が殉教した報せに接し，二人とも彼女の死への責任を感じて苦しむが，Celia の死は彼女自身の選択によった結果であり，自己犠牲と苦悩の生活の代価として彼女の死は輝かしい勝利であること，しかもその勝利に彼等は力も貸さず，死に対して責

任もないと Reilly によって語られる。しかし Celia への責任を感じないわけにいかない二人は過去の事実を現実として受け入れることによってそこから新しい意味を見出すことができることも教えられる。又かつて Celia を愛し今も愛している Peter は自分の利己主義を思い知らされ，新しく生きる決意を示す。このように Celia と彼等は第一の道と第二の道の関係であり，彼女の殉教の行為は生きている人々に新しく生きる意味を与える。最後に Edward は

Oh, it isn't much
That I understand yet! But Sir Henry has been saying,
I think, that every moment is a fresh beginning ;
And Julia, that life is only keeping on ;
And somehow, the two ideas seem to fit together.(12)

と言って人生の意味を理解しはじめる。

現代社会の他人に対する indifference と利己主義にあって相手への愛は自己の中に描き出されたイメージへの愛で，自己の世界から出ず，愛することをやめてしまった男と女がその状態を自覚し自己の何たるかを意識することによって，日々互いに死ぬこと，一瞬毎に新しい意味を見出すよう努力し続ける二人へと変化したわけである。彼等の生活はだからといって楽しみに満ちたものではなく，互いに理解できず苦しまねばならないが愛に土台をおくものといえる。

Murder in the Cathedral に戻って考えると Canterbury の女達として現われる Chorus の中に第一の道に共通したものを見ることができる。彼女達は Thomas と対照的で，彼女達に重要なことは自分達の生活を守ること，争いに巻き込まれずに細々と惰性的にこの世の片隅で生きることだった。しかし彼女達は何か超自然的な不吉な予感を感じて寺院にやってくる。Thomas の帰国が災いと恐怖をもたらすこと，自分達の生活に異変を起こし，苦しみを与えることを察知して，

We do not wish anything to happen.
Seven years we have lived quietly,

Succeeded in avoiding notice,
Living and partly living.
There have been oppression and luxury,
There have been poverty and licence,
There has been minor injustice,
Yet we have gone on living,
Living and partly living.(13)

と語る。彼女達は真実な生き方ではないことを感じているけれども，そこから脱け出す勇気もなく，時に流されるままに生きている人々の群である。Thomas の帰還とそれに続く彼の行動は彼等の不安をますますつのらせるばかりで超自然的力によって死の迫るのを予告せずにはおれない。同時に騎士達の Thomas 殺害の企ての中で何もしないで見ている自分達も実はその加害者の一員であること，この世の悪に染っていることに気づき始め，罪の意識にとらわれる。

I have smelt them, the death-bringers ; now is too late
For action, too soon for contrition.
Nothing is possible but the shamed swoon
Of those consenting to the last humiliation.
I have consented, Lord Archbishop, have consented.
Am torn away, subdued, violated,
United to the spiritual flesh of nature,
Mastered by the animal powers of spirit
Dominated by the lust of self-demolition,
By the final utter uttermost death of spirit,
By the final ecstasy of waste and shame,
O Lord Archbishop, O Thomas Archbishop, forgive us, forgive us,
pray for us that we may pray for you, out of our shame.(14)

このように自分達の何たるかを意識し，Thomas の死との関わりを自覚し，苦しむ彼女達に，

Peace, and be at peace with your thoughts and visions.
These things had to come to you and you to accept them,
This is your share of the eternal burden,

The perpetual glory. This is one moment,
But know that another
Shall pierce you with a sudden painful joy
When the figure of God's purpose is made complete,
You shall forget these things, toiling in the household,
You shall remember them, droning by the fire,
When age and forgetfulness sweeten memory
Only like a dream that has often been told
And often been changed in the telling. They will seem unreal.
Human kind cannot bear very much reality.(15)

とThomas は語り，かつて何も起こることを望まなかった彼女達ではなく，行為によるのではないが忍苦することによって殉教者の死に参与し，神の栄光を感じ取る人間に変化したことを語るが，同時に Thomas の言葉には第一の道を行く人々が一瞬この世の外からさす光を受けるが，日々の生活の業に戻り，人生に耐えていくことが示されている。こうしてThomas の殉教は唯ひとりの人のことであっても，それが神のなせる業のため Chorus の女達に深い影響を与え，罪の意識に目覚めさせ，殉教の苦しみを分かち持つと同時に神の栄光を高らかに歌えるようにさせる。彼女達は Thomas の死に立ち会い，その証人として神の創造物に対する愛を讃える。このような変化を見てくると Chorus の女達は生活自体に変化はないが意識に於いて目覚めた第一の道に属する人々といえる。

The Family Reunion ではあの indifference の状態にいる人々は登場するが，その中の誰かが変化するということは起こらない。叔父の Charles は理解しかけるが，年のせいにして直面するだけの勇気をもたず，そのまま留まる。先に述べたように Harry は罪の意識に悩まされながらも新しい出発をかすかに希望しつつ，八年前に去った家族のもとに帰ってくる。結果としては第二の道を選ぶが劇の初めの段階では彼自身が第一の道とも第二の道とも決っていない状態にいる。彼は内面の世界に気づかない家族の者達の外面的な生き方に憤りを感じながらも，自分は悪夢におののきながら，真実なものを発見できないで孤独と苦悩のうちに苛立っている。こ

の家族の中で叔母の Agatha と従妹の Mary が彼に光を与える役割を果す。Mary は Harry の幼な友達であり，Harry の母 Amy によって彼の妻にと予定され，ひき取られた。しかし Harry は家族の望まぬ人と外国で結婚し，Amy は一度たてた計画を中止できず，Mary もこれまでにこの家からでていくだけの勇気を持たず，Harry への愛を持ち続けている。二人の出合いは幼なかった頃の思い出に始まるが Mary は彼に対する深い愛から彼の状態を洞察することができ，

I haven't much experience,
But I see something now which doesn't come from tutors
Or from books, or from thinking, or from observation:
Something which I did not know I know. (16)

といえる。彼女の理解と愛に彼は深い感銘を受け，Mary の差し出す人間的な愛へと心をひかれる。Harry は，

You bring me news,
Of a door that opens at the end of a corridor,
Sunl ight and singing ; when I had felt sure
That every corridor only led to another,
Or to a blank wall ; that I kept moving
Only so as not to stay still, Singing and light
..... (17)

と答えて過去を捨て彼女との愛によって新たに人生をやり直すことができるかも知れないとかすかな希望を持つが，次の瞬間彼の望みは打ち消される。即ち Harry を絶えず追い，恐怖を与えていた複讐の女神達が姿を現わし，彼の今の望みは自己の真実の姿を見つめるのでなく，欺むき，ごまかすことにすぎないことを示す。Harry と Mary の間で人間的な愛に基づく第一の道の可能性が見られたが，それは否定される。Harry の進むべき第二の道は後に叔母の Agatha によって示される。この作品にも大きな部分ではないが，第一の道が表われていると考えられる。

以上のようにこれらの劇の中にも，はっきりとその道とは指摘されては

いないが，すでに第一の道，肯定の道が存在していたといえる。初めの劇で中心的だった第二の道がだんだん第一の道へと場所をゆずり，*The Cocktail Party* では主要テーマは第一の道となった。二つの道が明確にされたこの劇以後，否定の道をいく人々によって支えられていることを前提として *The Confidential Clerk*, *The Elder Statesman* では第二の道は触れられず，二作とも現代社会の普通の人を通して第一の道が取り上げられ，真実の自己に目覚めていく人々が描かれている。結局 Eliot の劇では肯定の道が大きな比重を占めることになる。

このような Eliot の変化の理由を考えると，改宗して間もない頃にはキリスト教の根本的な姿として多くの聖者達のでた修道者の道，否定の道が浮かび上ってくるのは確かである。直接的に神とつながる道であり，彼等の存在が教会の大きな原動力ではあるが，限られた人間にしか受け入れられない。彼が1939年 *The Idea of Christian Society* を書く頃には個人ではなく共同体としての社会の救いを考えるようになり，大多数を占める否定の道を取らない人々へ関心が向けられ，この世を離れてではなく，この世に密接につながりを持ちながら神を発見していく生活こそ，この社会を変えていく力となることに気づき変ってきたと言えるかも知れない。

現代社会の人々がそれぞれの環境の中で，自己に目覚め，真実の自己を直視した上で意識的な愛に根ざした生活をし直すこと，神の愛を自覚するところまで理解すること，この肯定の道を選んだ人々が増すことによって，彼の理想的な社会，"a society in which the natural end of man—virtue and well-being in community—is acknowledged for all, and the supernatural end—beatitude—for those who have the eyes to see it."[18] が徐々に実現されていくことが彼の望みであったと言うこともできる。

注

(1) *The Use of Poetry, The Use of Criticism*, (London,1933), p.153.

(2) *Collected Plays*, (London, 1962), p.189.

(3) *Ibid.*, p.190.

(4) *T. S. Eliot's Dramatic Theory and Practice : From Sweeney Agonistes to The Elder Statesman*, (Princeton, 1963), pp.158—162 を参照。

(5) *Collected Poems, 1909—1962*, (London, 1963), p.219.

(6) *Notes towards the Definition of Culture*, (London, 1963), p.64.

(7) *Colleted Poems*, pp.212—213

(8) *Colleted Plays*. p.134.

(9) *Ibid.*, p.132.

(10) *Ibid.*, p.153.

(11) *Ibid.*, p.182.

(12) *Ibid.*, p.212.

(13) *Ibid.*, p.15.

(14) *Ibid.*, p.41.

(15) *Ibid.*, p.43.

(16) *Ibid.*, p.81.

(17) *Ibid.*, p.82.

(18) *The Idea of Christian Society*, (London, 1962), p.34.